

諏訪湖環境改善に係る専門家による検討の場 委員からの要望資料

1 ワカサギ等の大量死に関する資料

番号	委員	要望事項	資料No.
1	宮原委員	ワカサギ死亡発見時 (7/26 付近) の水質測定結果 (硝酸性窒素、硫化水素、アンモニアなど)	資料 2 (図-12, 13)
2	沖野委員長	ワカサギの生育できる溶存酸素濃度、水温	資料 3-1
3	武居委員	植物プランクトン調査結果の詳細 (種別のデータ、この 3 年分くらい、最低でも 2 年分の比較) を示してほしい。	資料 3-2
4	武居委員	7/19 に茶色の水が諏訪湖で発生した際、水産試験場が確認した調査項目・結果は。	資料 3-3

番号 1, 2 は「第 1 回検討の場」(8/3)での要望事項、番号 3, 4 は 8/4 以降に要望のあった事項

2 諏訪湖の環境改善に係る資料

番号	委員	要望事項	資料No.
5	宮原委員	ブラックバス等の外来魚の駆除量	資料 3-4
6	山室委員	湧水量、地下水量、川の流速について過去からの推移	資料 3-5
7	武居委員	【湖岸堤直近の堤内地における地下水位 (井戸等) の推移】 25~30 年くらい前とこの 5 年くらいを比較できるデータ (建設工事による掘削時の出水状況などについてでもよい)。	資料 3-6
8	沖野委員長	諏訪湖の月々の平均滞留日数の過去からの推移	資料 3-7
9	武居委員	【釜口水門前面 (湖内) の浅場がなぜ必要なのか】 番号 7 で示した話題にも関連するが、釜口水門の前面 (湖側) は水深 2 m の浅場が作られている (釜口水門のホームページでも示されている)。水門付近の水深は基本的には 4 m であり、その前面に流れを阻害するような地形がなぜ必要なのか。この浅場がなければ貧酸素水塊の存在水深 (以前から水深 4 m、現在は 3 m まで拡大) と水門がつながり、貧酸素水の生成水深の水塊の固定化は防げるはずである。 (諏訪湖では、天竜川への流出促進策として浜中島の撤去をした実績がある。)	資料 3-8 資料 3-9
10	武居委員	【各流入河川の河川水量の推移 (流速の変化でも可)】 25~30 年くらい前とこの 5 年くらいを比較できるデータ。特に河川工事による河床断面の改変や河川流路付け替え等があった河川については、改変の概要を含む流況データ。	資料 3-10
11	武居委員	諏訪地方事務所環境課が所管して開催されていた「諏訪湖の貧酸素に係る打合せ会議 (ワーキンググループ)」における検討内容を総括し、資料として示してほしい。 この中で改善策の手法等の検討を進めてきたはずであり、今	資料 3-11

		<p>後の議論の基礎知識として有用と考える。</p> <p>個人的にもいくつかの提案を示した。当時は「できない」「効果がない」などの回答であったが、大量斃死等の現状を考えた時、再検討する意味があると考ええる。</p>	
12	武居委員	<p>提言・提案を実現させるための担保は。</p> <p>水質保全計画に限らず、県が策定する計画は各部局の施策を集めたものとの感がぬぐえない。今回の提言・提案を実現させるための担保はあるのか、各部局の施策とどう合致させていくつもりか（内容、スケジュール面等）。</p>	資料 3-12
13	宮原委員	<p>ヒシの刈り取った面積やその重量についても経年的な情報をご提示いただきたい。</p>	資料 4

番号 5, 6, 8 は「第 1 回検討の場」(8/3)での要望事項、それ以外の番号は 8/4 以降に要望のあった事項

【資料担当課】

資料 2, 資料 3-2, 資料 3-4, 資料 3-12, 資料 4 水大気環境課

資料 3-1, 3-3 水産試験場諏訪支場

資料 3-5～3-10 諏訪建設事務所

資料 3-11 諏訪地方事務所環境課

(資料3 追加)

番号	委員	要望事項	資料No.
14	山室委員	<p>今回のワカサギ大量死の際、他の魚やエビなども死亡していたのでしょうか？もしほとんどがワカサギだったのなら、原因は貧酸素ではないと思います。</p> <p>宍道湖では、貧酸素水が湧昇しても、死ぬのはコノシロなど淡水河川に逃げられない海産魚で、ワカサギは死にません。同じことは武井委員も指摘されているので、貧酸素以外の可能性も、もう少し考えていただければと思います（例えばウイルスとか）。</p>	— (下に記載のとおり)

【水産試験場諏訪支場 回答】

ウイルス等の疾病については、次の点から可能性はほとんどないと考えています。

- ① 死亡は1日程度の間起きています。このような短期間で発生・終息する既知の魚病は確認されていない。
マス類の IHN、コイのヘルペスウイルス病等の急激な死亡を伴うウイルス性疾病でも、死亡開始から終息までは1～2週間程度である。
- ② 魚病の原因ウイルスは、宿主特異性が高い。今回の死亡は、ワカサギだけでなく、コイ、フナ、ニゴイ等も死亡しており、1種類のウイルスによる疾病とは考えにくい。
- ③ 死亡魚のウイルス検査は実施していないが、外観、内臓の観察では、魚病が疑われるような症状は見られなかった。
- ④ ミズカビ病などは見られなかった。